方向

第一三一号　一九九一年六月五日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

歌人・大塚五朗（三）

1991 5 18　原田憲雄

嵯峨野の表情

一九三九年（つづき）　五朗、四十二歳。

前回の一月二十七日付葉書にみえる「高田君」というのは、原田の三中・龍谷大学を通じての学友である高田益雄。幼いころ両親に死別し、叔父である禅僧の心山義繁に引き取られ上京区出水通六軒町の光清寺に起居していた。このとき、原田の友人では高田のほかに赤谷明海・柴野純・杉田荘作・宮崎篤三郎らが西の研究会に出席するようになったと思う。赤谷と柴野は龍谷大学の同級。赤谷は原田よりは三歳年長、学生ではあるが、すでに京都市右京区花園の律宗法金剛院の「副住職」で実際上の住職、仏教學専攻。柴野は後に名を純孝と改めた。高田とともに宗教學専攻。杉田は同志社大学で経済学専攻。宮崎は、高田・杉田の小学校の同窓で、父親とともに織物業を営んでいたが、おだやかな人柄で「篤さん」とみなから親しまれた。西の研究会は、初めからずっと大塚宅で開かれる。二、三月は十七日。二月は詠草は十首以内だったが、三月以後五首以内となったのは会員が増えたからであろう。会費は一回十五銭か二十銭で、これは茶菓・通信費、不足分は先生が負担されたのだろう。

この年四月、五朗の三男哲が京都市立御室小学校に入学した。

『水甕』昭和十四年四月号。

冬　山

古葉すでに落してやせし寒竹のそよろと高き朝朝の霜

張り終へし網を守るとしばらくはひそみし山の山風の音　兎狩　（庭三七）（前年四月の作参照）

今日稀に晴れて二月の日は寒し空の邃（ふか）きに雪もてる山

春待つと村のひそけさそこここの野辺は枯草の黒く焼かれて　大和岡寺附近　（庭三三）

大和路は冬まだ寒し風の中を子の泣くこゑが遠くきこえて

雨の中を鳴きてよぎれる鳥ありてただにひろらにこの庭はある　（〃〃）

西の研究会は、四月十八日、五月十七日、七月十六日に開かれ、六月の案内状が残っていない。この六月には五朗の最初の随筆集『嵯峨野の表情』が出版されたので、あるいは研究会はなかったのかもしれぬ。四月九日消印原田宛葉書に、

御端書有難う。小生の体に就て御心配をかけて済みません。どうも近頃少々体の調子が悪く、いささか困っています。……／それからもし暇があったら（無理はしないで下さい）嵯峨人形に就て、その沿革的な事、及特徴等に就て調べて頂けたら有難いと思っています。先日府の図書館に行ったが、思はしい調べも出来ずに来ました。……例の京阪の方の嵯峨は原稿が出来て送附ずみなんです。ただその中へ嵯峨人形のことがわかれば入れたいと思っています。……

とあり、「京阪の方の嵯峨」がこの本を指す。

『嵯峨野の表情』は京阪電気鉄道株式会社、通称「京阪電車」または「京阪」が、沿線の名所旧跡の宣伝を兼ねて企画した『趣味の京阪叢書』の第二輯で、一二・五×一八・五センチ、本文一一八頁の冊子。奥付によれば「昭和十四年六月五日印刷、十日（初版）発行。定価参拾銭」。手許の本は「昭和十六年十月一日再版」のもので、奥付の裏の広告によると、この叢書の各輯は次の通り。一、中村直勝『水無瀬・山崎附近』　二、大塚五郎『嵯峨野の表情』　三、望月信成『宇治・醍醐』　四、羽栗賢孝『琵琶湖点描抄』　五、稲山始『落北素描』。

このあとに「近刊」として角倉太郎『比良山』と藤原義一『京阪の古建築（仮題）』が掲げてある。

『嵯峨野の表情』の目次。（　）内は頁数。

序　説　嵯峨野に遊ぶ人に（三）　平安京と嵯峨野（三）

史蹟の嵯峨野　大覚寺と南朝（一三）　雄倉殿址と亀山殿趾（一六）　栖霞観と清涼寺（二一）　野の宮と斎宮（二三）　大堰川行幸と嵐山。小倉山（二五）　車折神社と清原頼業（三一）　天龍寺・臨川寺と夢窓国師（三三）　宝篋院と小楠公首塚（三七）　厭離庵と藤原定家（三八）　落柿舎と去来（四四）　直指庵と烈女村岡（五〇）

物語の嵯峨野　往生院と祇王祇女（五四）　三軒家と小督の局（六〇）　三宝寺と滝口入道（六五）

文化史的に見た嵯峨野　角倉了以と大堰川問題（七二）　嵯峨焼と陶野（七六）　嵯峨の竹やぶ（七八）　嵯峨本（八〇）　嵯峨人形（八三）

嵯峨野景観　月と広沢池（八八）　花と大沢池（八九）　若葉と嵐峡（九一）　野の道・山の道（九三）　嵯峨十

景（九六）

年中行事と嵯峨　嵯峨大念仏（一〇〇）　嵯峨のお松明（一〇三）　御身拭ひの会式（一〇五）　十三まゐり・針祭（一〇七）　愛宕の千日参り（一〇九）　御舟遊び（一一〇）

嵯峨野年表

跋　文

小冊子ながらよくまとまり、当時の嵯峨野の風趣を叙情ゆたかに伝えて評判あがり、紙の乏しい戦時・戦後も何度か版を重ねた。このなかの文章の幾つかは後に『京都風土記』『続京都風土記』に再録された。

これで気持は高揚したが、勤め先の学校では、「集団勤労」と名づける生徒動員がはじまり、五朗の体の調子はあまりよくない。七月十日消印の原田宛葉書にいう。

…小生の体其後大分よい様ですが時々疲労を覚えるので注意してゐます、それにこの暑さのためにいささかたぢゝゝの体です。…昨日森田君が見舞に来てくれました、久しぶりで歓談、嬉しい半日を送りました。

しかし八月中旬には横浜に兄広通をたずね、東京の水甕本社に編集者の松田常憲を訪問し、信州に出る。二十一日消印の原田宛絵葉書に、

とうとう信州へ来た。信州は素晴らしい。秋色満野、耐らない程の魅力をもってゐる。今宵はさびしいがしかし幽邃なる松原湖畔にとまる。歌更になし、いづれ家にかへって落つかなければ駄目らしい。明日は松代へ出て墓参、どこか温泉に手足をのばして二十三日頃帰洛の予定

春夢女史の『誰が罪』（六）　1991 5 16　原田憲雄編

第九回

此の山の上は平に切り開かれて一面の芝生は緑の毛氈を布きつめしが如し一二軒の茶屋あり又吾妻屋など有て春はなか〻〻人出多く此山の名高き田楽に粋も不粋も酒汲まぬ者なし然れど夏は茶屋の店も閉ぢてあれば人影も見えずして寂漠たり後より登り来れる倭文子は急に岡野の先に立ち

「此方へいらっしやいまし此方が一番好い景色なんです」

極しもなき海原のこゝかしこに漁船出没し雪の如き白浪は長く続ける松原の隙より見へつ山陰に草屋のほの見ゆるなど遠く見渡したる景色は如何なる絵師も筆を投棄つるならん岡野は宛から酔へるが如く恍惚としてどうも何とも云へぬ絶景だ之をあの嶌や中山などに見せてやりたい独り夢中になつて眺め居りしがふと倭文子はと心づき見れば彼女は手持無沙汰にや芝生に蹲んで頻りに草をむしり居たり岡野の視線は最早景色にあらで屢々倭文子に向きぬ

思ひきつてかの件をいひ出さうか今が調度い〻此時を外しては又と無いかもしれん彼女はきつと我望みを叶へてくれるに相違ない実に愉快だいや〻〻之は余り自惚かも知れんどうも彼女の様子は我を愛して居ぬ様だもし万一いやと弾かれたら其時の我心はどうであろう夢中になって彼女を力一っぱい抱きしめてこの山から落ちて二人で死ぬばかりだそれでは倭文子を殺すのだ大事な倭文子を殺してはならぬ我愛はそんな報酬を望む様な卑劣なのではない神聖の愛であるもと〻〻彼女が我を愛したから愛したのではない彼女の我を愛せぬ前に愛したのであるし

て見れば今更彼女が我を愛さぬからとて彼女を憎む筈はない彼女がどうであろうが我は彼女を一生愛し生涯彼女の幸福を祈らねばならぬ然し大丈夫随分彼女の為には苦労してやつと此所迄きていながら目的の高根の花を折らずに神だつて我を今谷底に落す筈はない第一彼女はそんな人情なしではない

かく岡野は独りきめて倭文子を見る折しも彼女は身を起こし

「岡野様あちらの方へ参りませうかあっちからは町中が見へます」

岡野は急に動悸烈しく胸騒ぎ立って行く倭文子を呼び止むる勇気も失せてつひにいひそゝくれぬ

倭文子は藤棚の柱に身を倚せかけてあれは何之は何といふ所と白魚の如き指をさして示すを岡野は只はあゝゝと無心に答へつゝ今あの事を云ひ出さんか云ひ出さんかと心のみ騒かれて兎角云ひ出し兼他の話に又もや移りその中山寺の鐘は十二時を報しぬ倭文子は口の中にて数へつゝ

「もうお正午でございますねそろゝゝ帰りませうか」

岡野は今いはねばもう駄目と心を決し

「倭文子さん」

と呼びかけたり倭文子は洋傘を鳥渡傾けてつまらぬ草花を何処で取りしか大切そうに手に持ちながら筌爾として岡野を見し顔の総毛立つ程の麗はしさ斯る事には初心の岡野何と初めに云ひ出してよきや又もや躊躇せしが一生の勇気を奮って

「少し貴嬢にお聞き申たい事が有るのです」

貌(かほ)は笑ひ居たれど目は至(いたつ)て真面目なりき倭文子は別に是に気も付かず
「何でございます」
此度は貌(かほ)迄も真面目にして
「変な事を聞く様ですが昨日お父様のお話では貴嬢はどこから貰ひに来てもみなお断りなさるそうですが・・・誰か既に御約束なすった方があるですか」
倭文子は火の如く真赤になつて顔も得上げず(ママ)
「いいえ」
と聞えぬ様な声にて答へぬ
「そんなら何(いつ)れ何所かへお出(いで)になるのですな」
「どうだか存じません」
岡野は其時一寸眼鏡の端を抑え如何にも思ひ切った様いひ憎そふに而も貌(かほ)を真赤にして
「では倭文子さん余り失敬な事申す様ですがな・・・貴嬢僕の所へ来てくださる心は有りませんか」
倭文子は無茶々々に羞かしくなり目も暗むばかりに上気して前後の考もなく
「そんな事はいやです」
岡野は思はず倭文子の背を捉へその手をふるぶる(ふるふる)慄(ふる)はせ
「そんな事って何も悪い事じゃないでせうほんとにいやなのですか」

血眼になつて倭文子を凝視ぬ倭文子はいよ〳〵夢中にて

「ほんとに嫌です」

なあに失敬な人情知らずいつそこうしてやると岡野も夢中になつて固く握りつめた石の如き拳をあはや振り上げんとする一刹那倭文子は落した花を拾ひながら恐る〳〵岡野を見上げし罪なき顔の可愛らしさ自づと拳も弛み気もくぢけ

嗚呼我は良心に恥かしい神聖々々といひながら今の挙動は何の事だ是では矢張卑劣の愛であり倭文子の為我命は最早捧げてあるのだされば我は失意の人となつて思ひ死にするも彼女に害をしてはならぬと思ひ来りと思ひ来り思ひ去れば多年秘蔵せし宝を失ふた心地して何ともいひ難き一種異様なる悲哀の感情にうたれぬ

第十回

本郷なる上等下宿屋の二階に端然と机の前に座し頻りに書見せる岡野一郎何思ひけん嗚呼と大息して天井を睨め又忽ち頭を抱へて机に伏しつまらぬ〳〵と口の中にて操り返しつゝむく〳〵と又もや頭を上げ

矢張我は凡夫だどうしても彼女を友として妹として愛する事は出来ぬ我者即ち妻と為なければ満足せぬ我は山で彼女の返事を聞いて不愉快で〳〵一時も早く東京へ帰りたくなつたので早々あの日の昼過出立したが倭文子は我が挙動の変なので心配して居たらしい彼女が夕飯を進めた時我はいらぬと云ひてどうしても食べなかったその時彼女は泣き出しそうな顔をしていた門を出る時正一も叔母も皆な〳〵元気よくさよならといひたが倭文子ばかりは叔母の後に頭を下げたま〳〵何とも云はなかつたがどうやら泣いていたらしい愛さない我が為めなぜ泣いたので

あろう是が如何にも気になるあの返事は恥かしさの余りあゝいひたのかも知れぬなぜ我は二三日ゆっくりと止まつてとつくりと倭文子の心を聞かなかったのであろう彼岡野はつと起て障子を明れば軒に簇れる蚊二つ三つ耳許に泣て来りぬ彼は五月蝿そうに追へどゝゝ逃げ去らぬに又もや瀾瀾簇々と起り煙乎と元の机の前に座し

いやゝゝどうしても彼女は我を嫌ふたのだそうでなければあんなに瞭然とは断はれるものでない泣て居たと思ふたのも或は笑ふていたのかも知れぬ実に残念だ可愛さが余つて憎さが百倍とは此事であろう長い間馬鹿な事を楽しみにして居たのも口惜しい人情知らずめ我は世に望みがないやがて死ぬるのだその時は必ず一人じや死なぬ彼女と一所だ

彼はむつくりと立つてどしゝゝと室の周囲を歩き初めつどうも不愉快だいつそ寐てしまうと下女を呼び床をとらせ寐こ〈床〉へ寐て見たが神経益々鋭くまんじりとも眠らで夜は明けぬ斯の如く岡野は三日三夜さ食事もろくに為さで考へ続けし四日目の朝例の如く書見などし居りしが何か急に物に感ぜしが如くむづと両手をくみ青き顔に一層悲しみの色を現し

嗚呼かの可憐の倭文子罪なき清き倭文子我はどうしても思ひきれぬ憎まれぬましてや殺すことは出来ぬ彼女は決して不人情ではない彼女は初より我を友として又は兄として愛していたのだ其れを我独り勝手にきめていたのが悪い今も倭文子は我を友として兄として充分愛して居るに違いない我も之からは其積りになつて彼女を充分愛せねばならぬ・・・然し倭文子が人の妻となつた暁には平気で見ては居られぬ死んだ方か余程ましだ嗚呼世はいやだつまらぬあゝ非常に頭痛がやってきた

と彼は両手にて頭を抑へ何事にか襲われしか如くぶるゞゝと体を慄せて後方に倒れたり

※　※　※　※　※

岡野が帰りてより何となく心すぐれぬ倭文子室にのみ閉し籠居るもと庭を散歩しては見たものゝ面白くもあらねば又速に室に帰り来れば机の上に郵便あり見れば岡野よりの手紙なり

我はふと感冒の心地にて床につきけるにいつしか熱病に変し今は我命旦夕に迫りぬ今更無益なるいひて清き御身か心を害ふも不本意なから今はの際にいはねば心苦し我は御身を四谷の家に見てし時より今日迄一日も忘るゝ暇なく独り勝手に未来の妻と定め卒業した暁には共にスウヰート、ホームを作らんものと楽みに為しゝも今となりては水の泡されど御身を恨むべき様なし又我愛は変るべき筈なし我が多年御身に尽くせし親切は報酬を受くる為にはあらざりき然し嬢よかの山にて御身が返事を聞かぬ前には斯く思ひ居りしも偖かくなつて見れば凡夫の我恥かしながら思ひきる事能はずさりとて情欲を逞ふして無理にも御身を我が妻とせんとはなほ更思はずつひに我は情欲即ち卑劣な愛に打勝て終りまで御身を愛せりされば此の失意者の心の中を察しなき後にて御手づから一辺の回向を給はらばいかに満足ならん何卒御身は早く好き人に嫁し父上を安心させ行末長く栄え給へとの悲哀の文意

倭文子は之と共に彼が送り来りし彼が卒業の帰途新調の洋服にて写せし写真を取り慄へる唇をかみしめて凝視と眺め

岡野様赦してください実に妾が悪うございました妾は初から友等の様に兄様の様にお慕ひ申て居って決して貴方の妻になろうなどゝはすこしも考へませんでしたそれにあの時は全く羞かしさに気が変になつて自分でさへ何と

返事したか分らないくらいでした然し是程思ふてくださると知ったならば又かく迄失望さすると思ったならましてや斯(かか)る清き御心を知りましたなら決してゝゝいやとは申(もう)ませんでした妾はとてもこの先最早貴方の様な真実に私を愛してくれる人は再び得られません

と倭文子は写真と手紙を顔に抑(おさ)あてゝ声も惜しまず泣き伏しけり

※　※　※　※　※　※

東都の山の手辺の某女学校に年の頃二十一二の叔〈淑〉女と嘱高き美人の女教師あり五月蠅(うるさ)きまで諸々〈諸所〉より人を以て結婚を申込めど決して受けず聞けば一生独身にて送る決心とか髪衣裳には心をかけず一身〈一心〉に教育に従事し居る殊勝さ此の美人一月に一度は必ず谷中なる墓に詣るよし

※編者あとがき※　以上で春夢女史の小説『誰が罪』はおわる。「明治二八年十二月十七日夜／いと淋しき折」の日付をもつ「あはれなる少女」は『誰が罪』の後日を語るような小品だが、作風からは「誰が罪」のほうが後に書かれたと感じられる。「あはれなる少女」も『誰が罪』も、女史の生前には発表されなかったようである。その理由は、女史死後の今日、もはや知りようがない。

『誰が罪』の初めのほうは総ルビが振ってある。世間に発表するつもりでの作業だったかも知れぬ。しかし当時は総ルビの印刷物が多かったから、小説風のものは殊にルビをつけるのが法則と思い込んで、発表の気持もな

いのに振ろうとしたのかもしれぬ。この小説での仮名遣いは混乱しているが、当時、仮名遣いについて新しい主張があり、教育現場でも改廃が繰り返されたらしく、そこから生じた混乱が、この小説にもろに反映しているのであろう。女史の作品にはそのような素直さが感ぜられる。

『誰が罪』は、春夢女史が世に発表する意思もなく、中野逍遥の魂を鎮めるために、逍遥の《愛のことば》をたていとにして織りあげた、女史の《愛の羽衣》とでも見るべきものではないか。

さる三月二十六日、二宮俊博氏が中野逍遥の小説『慈涙余滴』と雑誌『鶴城青年』掲載の逍遥の文数篇の複写を恵投された。『慈涙余滴』の全部を読みえて、そのなかの「老婦」と「少女」とは、箕輪武雄氏の説のように「夢（もしくは理想）を語るための装置」と見るのが正しく、ちょくせつ春夢女史やその祖母と結びつけないほうがよい、と思った。

しかし、逍遥が『慈涙余滴』を書き始めた一八八六年には、かれは春夢女史の兄春児と交際していて、本所石原町の宅を訪ね、祖父の玄益にも会っているらしい。玄益は『慈涙余滴』のはじめに片鱗を描いた老紳士に彷彿するところがあり、これを女性に変身させれば『慈涙余滴』の老婦となりうる。『誰が罪』に描かれる倭文子は優柔不断で『慈涙余滴』の「少女」には似ないけれども、逍遥から見た坪井すむは「秀慧卓牢」だったかもしれぬ。これらはもとよりわたしの作業仮説にすぎないが、『誰が罪』に逍遥の作品や書翰をつきあて、坪井関係の資料を参照してゆけば、そのなにがしかは明らかになってくるだろう。

次号からは、そのような注釈的作業を進めつつ、新しい資料を紹介してゆこう。

中国の詩人と仏教　（一四）

1991 5 28　原田憲雄

一六、落　日　（二）

三、中国で落日がうたわれることにおいて画期的であるのは、陶淵明や謝霊運の生きた四―五世紀である。

四―五世紀というと、魏の後を受けて中国を統一した晋が、内乱と異民族の進入によって滅び、漢民族の権力者の多くが大江（揚子江）下流地帯にのがれ、かれらに推されて晋の一族の司馬睿が建康（江蘇・南京）に都して東晋の朝廷を開いた前後から、次の宋朝にとってかわられるころまでをさし、北方では異民族の諸国がはげしく興亡し、いっぱんに「南北朝時代」とよばれる時期の前半にあたります。

落日をうたう詩人は、二つの時代の境目に生きる人が多かったが、動揺と不安に満ちたこの時代は、それまで限られた知識人によってしかうたわれなかった落日への眼を、広範な階層のひとたちにも開かせることになりました。

落日出前門　落ちる日に　門さきに出て、
瞻矚見子度　眺めていたら見えました　あんたの行くのが。
冶容多姿鬢　きれいなお顔に　髪の毛たっぷり、
芳香已盈路　いい匂い　路までいっぱい。

これは当時、大江下流、ことに建康を中心とする地域に発生した民歌のなかでも「子夜歌」とよばれる一群の歌のひとつです。あちらこちらで幽霊がうたっていた、といった伝えもあるのですが、内容からいって、幽霊と結びつけなければならないようなものではなく、「子夜」という名の女のひと（たぶん歌妓）が作ったという別の伝えが正しいのでしょう。花柳のちまたでうたわれたものでしょうが、浮ついたものではなく「声は哀苦に過ぐ」ということですから、悲痛な調子のものだったのでしょう。

四、落日をうたう詩人は、北方山間のひとより南方水辺のひとが多い。

さきにあげたひとびとのうち、屈原・陸機・子夜・陶淵明・謝霊運・鮑照がそうであり、徐幹・曹植は北方のひとですが、ともに黄河沿岸地方に住んでいました。寒冷の山間では夕日はつるべおとしに沈んでしみじみと眺めるいとまはありませんが、湖沼海洋に富んだ暖熱の地の夕陽ほど美しく心に沁みるものはない。インド洋上の落日をみて自殺するひとがすくなくないと聞いたことがありますが、超現実的なまでの美しさが、死を甘美なものと思わせて、金色の海面が人を誘うのでしょうか。

五、落日詠と釈尊追慕・浄土信仰。

この時代の不安と動揺に満ちた精神に救いを与えた著しいものに仏教、ことに釈尊への追慕や浄土信仰があります。中央アジヤの亀茲国の僧鳩摩羅什（クマーラジーヴァ）が姚秦の都長安に連れてこられたのが四〇一年十月ですがそのとしのうちに『金剛般若経』、つぎのとし『阿弥陀経』、四〇五年『大智度論』、四〇六年『妙法蓮華経』（『法華経』）『維摩詰所説経』（『維摩経』）を翻訳します。般若系の経典は「空」を説きますから、

理論としてはむつかしいのですが、きのう栄えていた権力がたちまち滅びるのを目の前にみていたひとびとには、なまなましい真実として受け取らざるを得なかったでしょう。『大智度論』は般若経の注釈ですが、仏教概論ないし仏教百科事典ともいうべきもので、大乗・小乗とりまぜごっちゃに流れ込んだ仏教経典を体系的にとらえなおすことを中国人に教えたものといえましょう。『法華経』は釈尊恋慕を強調し、『阿弥陀経』は浄土欣求を説き、『維摩経』は専門の僧とならなくても仏の教えを体得しひとびとのために尽くしうることを示します。

いっぽう、廬山（江西）の慧遠が、四〇三年七月、白蓮社を結んで浄土信仰を鼓吹し、四一二年には釈尊の像を刻み、この年インドから法顕が帰国し、四一三年にはその法顕の手で『大般泥洹経』が訳されます。四二〇年には仏馱跋陀羅が『華厳経』、次の年、曇無讖が『大般涅槃経』、宝雲が新『無量寿経』を訳し、四二五年前後に西域からやってきた畺良耶舎が『観無量寿経』を訳します。

泥洹も涅槃も、梵語ニルヴァーナの訳語で、迷いの火を吹き消した状態をさし、それが釈尊の入滅（死）をあらわすことばとなりました。『大般泥洹経』『大般涅槃経』ともに釈尊の入滅を主題とし、その教えを回顧するもの。『華厳経』の教主の毘盧遮那仏が梵語のヴァイローチャナで太陽をさすことはよく知られ、太陽のように燦然と輝き、光と熱にたぐえるべき智慧と慈悲をなにものにも惜しみなく平等に与え続ける仏を説いています。

また『無量寿経』『観無量寿経』はともに阿弥陀仏の西方浄土を教えています。

仏日大千（世界）を照らせば、闇冥処を知らず。　（姚秦・竺仏念訳『菩薩瓔珞経』）

大仙涅槃に入り、仏日地に墜つ。（北涼・曇無讖訳『大般涅槃経』）

常に誓願を作す、仏日を離れざらんと。（〃　・〃　『金光明経』）

唯願わくは仏日、我をして清浄業処を観ぜしめたまえ。（宋・畺良耶舎『仏説観無量寿経』）

このころ訳された経典には、釈尊を太陽にたとえ右のように「仏日」とよぶものが多く、ひいては釈尊の入滅を落日に象徴することが普遍化してきたようです。

我れ諸々の衆生を見るに、苦の海に没在せり。故に身を現わすをなさず、そをして渇仰を生ぜしむ。その心恋慕するによってすなわち出でて為に法を説く。（姚秦・鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』）

乱世の苦の海に沈んでいると自覚するひとびとにとっては、入滅されたと思った釈尊が、恋慕する衆生には、身を現わして救いの手をさしのべ法を説かれると聞けば、いよいよ思慕したでしょうし、インドであまたの仏像を拝んできた法顕の話を聞き伝え、釈尊への憧憬を仏像建立に結晶させようとする気運が、盛り上がったのでしょう。

また、現世の苦を逃れるにはあまりにもおのれを愚かで弱いと感ずるひとびとは、阿弥陀仏の浄土へ往生したいと願ったでもありましょう。『観無量寿経』はそのようなひとに、次の観察法を勧めるのです。

みな日没を見ば、まさに想念を起すべし。正坐して西に向き、諦かに日を観じ、心をして堅く止め、想いを専らにして移らざらしめ、日の没せんとして、状の懸けたる鼓のごときを見よ。すでに日を見おわらば、目を閉ずるも目を開くも、みな明了ならしめよ。これを「日想」となし、名づけて初観という。次に水想をなせ。水の澄清なるを見、また明了にし、分散の意なからしめよ。すでに水を見おわらば、まさに氷想を起すべし。氷の映徹るを見なば、瑠璃想をなせ。この想なしおわらば、瑠璃地の内外映徹るを見ん。下に金剛七宝の金の幢ありて、瑠璃地を擎ぐ。その幢八方にして、八楞（角）具足し、一々の方面、百宝よりなる。一一の宝珠、千の光明あり。一々の光明、八万四千色。瑠璃地に映じ、億千の日のごとく、具さに見るべからず。瑠璃地の上、黄金の縄をもって、雑廁間錯たるも、七宝をもって界し、分斉分明なり。一々の宝中、五百色光あり、その光は華のごとく、また星月に似たり。虚空に懸処して、光明の台となる。楼閣千万、百宝合成す。台の両辺におのおの百億の華幢と無量の楽器ありて、もって荘厳となす。八種の清風、光明より出で、この楽器を鼓すに、苦・空・無常・無我の音を演説す。これを「水想」となし、第二観と名づく。・・・

このような観法が十六述べてありますが、その第一が落日の諦観であり、第二が水の凝視であることは、興味ふかいことです。

ところで『観無量寿経』は、月輪賢隆博士の研究によると、畺良耶舎の翻訳というのは疑わしく、インドで生

れたのでもなく、中国で作られたものと考えるべきだそうで、博士の説は、今日ではほぼ定説となっています。

中国で作られた仏教経典を、いっぱんに「偽経」といいます。だから博士の説のとおりならば『観無量寿経』は偽経ということになります。偽経ではありますが、まったくの無から作り出したものではなく、後漢の支婁迦讖が訳出した『般舟三昧経』以来の観法に、インドないし中央アジヤに源流をもつ禅観や浄土思想を総合調節したものでありましょう。ともあれ、当時はまことの仏経と信ぜられ、阿闍世王と韋提希夫人の物語は、親子が殺しあう権力者たちの姿に世を厭うひとびとを深く打ち、阿弥陀浄土を描くその美しい文章によって心をとらえたのであろうと思います。

偽経の製作の動機はさまざまで、権力者の欲望達成を正当化するために作られるものまで出てきますが、繰り返しが多く、分かり難いことばが出てくるインドの経典を、中国人にのみこみやすいように編集しなおしたものがかなりあって、『観無量寿経』などはその代表なのかもしれません。だとすると中国人が仏教をここまで血肉化した、とみるべきであって、その作者の名がしれないことは、かえって無名の中国人のなかにこれほど優れた仏教徒が育っていることの証しともいえましょう。かれらのなかには僧もおれば、在俗の人もいたのでしょうが、もし名がわかっておれば中国文学史に特筆すべき詩人・文人です。いっぱんに文学史はこういう無名の作者の取り扱いに冷淡な、あるいは無頓着なところがあり、また政治体制が仏教を好まないところから、仏教徒の作品に注がれた無名の民衆の文学的な労作の評価には親切でないように感ぜられます。それらのこだわりから離れて、率直に作品そのものを見直す時機がきています。

慧遠が『観無量寿経』を読んだかどうかは不明ですが、この経が中国で作られたものならなおさら、その観法はすでにあるていど普及しているものを整理したものでしょうから、仏教界の情報に精通していた慧遠が知らないはずはなく、日想観や水想観はかれの指導に従うひとたちにはすでに親しく、かれらを通じて、詩人や一般社会にも知られていたと考えられます。

現存する中国の詩で、最初に「落日」の語をもちいたのは徐幹でした。かれが仏教経典を読んだかどうかはわかりません。しかし支婁迦讖の『般舟三昧経』などが訳されたころに生れ、のちに魏の曹操に仕え、その子の曹丕や曹植と親しかったひとですから、読んでいなかったと断定することもできません。

ただ、それまでの中国人にはめずらしい夕日にたいする凝視が「落日」という新しいことばで表現された三世紀初めが、中国人にとっては異質なインドの仏教、なかでも観法や浄土思想を紹介する経典が初めて翻訳された時機と雁行し、花柳のちまたでうたわれる歌にまで落日があらわれる四世紀末五世紀初めが『法華経』や『涅槃経』が翻訳され、『観無量寿経』が生み出される時機と重なり合うことのなかに、偶然ではないものを、わたしは感じるのです。

仏教の思想が中国人の感性を変えて落日に美を見出させるようになったとみるべきか、中国人の感性が落日に美を見出すまでに発達したとき、仏教をみずからのものとして内面化するようになっていたとみるべきか、そこらはどちらと断定しにくいのですが、まあその両方が相乗的にこのような結果をなしとげていた、ということでしょうか。陶淵明・謝霊運については、改めて述べなければならないでしょう。

図書館

1991 5 30　原田慶

家の本棚には、町の古本屋さんや、北野の天神さんの夜店など、いろいろな方面から買い集めたらしい文学や歴史などの本があり、寺の文庫は仏教関係の本が基本だが新しい宗教書が加えられつつある。おかげでわたしの知りたいほどのことは、その中でたいてい間にあったので、あまり図書館に通うこともなくすましてきた。

こんど、大津絵のことを考えるとき、事典や辞典類のほかに参考になりそうな本がなかった。大津絵とはどういうものか、その「藤娘」はどこから来たのだろう、そんなことが知りたくて、久し振りに図書館へ行った。

「京都市中央図書館」は、もとの市民病院の跡地に、「京都市社会教育総合センター」として昭和五十六年四月に開設された。わたしの住所から十分くらいの、中京区丸太町七本松西入が所在地である。他に右京・北・左京・下京・醍醐・西京・東山・伏見中央・南・向島・山科・洛西にもあるが、いま下京図書館と山科図書館になっているものが、もとは市の主だつ図書館で、それを現在の京都市中央図書館としてまとめ、他は分館というようなことになったらしい。

センターの左の入り口が図書館である。一階が児童図書室、二階を成人図書室と呼ぶ。二階に上がるとすぐロビーで、椅子が並び、雑誌の書架が置いてある。右へ行くと開架の図書室で、複写機などはここにある。左へ行くとカードボックスが並んでいて、その奥が資料室になっている。わたしは開架の図書室にしか入ったことがなかった。

この日は、大津絵を見たいと思っていたので、初めは大型の美術図書の棚をさがした。浮世絵などはあるが、

大津絵はない。芸術、絵画、芸能、趣味などの棚を順に見ていったが、それらしいものはなかった。

次に文学の棚へ行って、有島武郎の「ドモ又の死」をさがした。『有島武郎全集』はあったが、これは日本文学全集のなかの一冊で、「ドモ又の死」は入っていない。求める資料というものは簡単には見つからないものだ。

カードボックスを調べてみると、有島武郎の全集は何種類かあるが、「ドモ又の死」がどの全集にはいっているのかわからない。大津絵の本も二冊あったが、どこに配置してあるのか見当たらなかった。これは尋ねるより仕方がないと思って、貸し出し係の人のところへ行ってわけを話すと、有島武郎の全集は書庫に入っているかもしれないので、資料室で聞いてくださいと言われた。

資料室で、まず「ドモ又の死」を尋ねると、係の人はすぐコンピュータを押した。わたしからは見えないが、画面に図書館にある有島武郎の本がみんな出ているらしい。それを見ながら、すぐ後の棚から冊子を取って調べている。「全集のなかに『ドモ又の死』の入っているのがありました。書庫から出して来ますので待っていてください」と言って、近くの入り口だけが見えている書庫へ入っていった。すぐに持ってきて、貸し出しの係のほうで借りるようにと言われたので、ついでに大津絵の方も調べてもらった。これもコンピュータを打って「二冊ありますが、一冊は資料室のもので持ち出しができません。資料室で見てください。もう一冊のは開架のほうですからそちらへ行ってください」といって、書名と分類番号をしるしたメモをわたされた。

資料室の本は『大津絵　街道に生まれた民画』（光琳出版）。開架のほうは『大津絵の美　街道の民画』（鈴木仁一著、芳賀書店）で、カードボックスで調べたのと同じだった。直接「大津絵」と名のつく本は館内に二冊しかないことになるが、それを見ることで、他の資料を見つける手掛かりができる。研究する人がどのようにし

て調べたり考えたりするのかと、逆にたどっているようなものである。

その日は『有島武郎全集』の一冊を借りた。『大津絵の美』のほうは見当たらないので、係の人にいうと、見つかったら電話するから予約しておくように言われた。ずいぶん素早くいろいろなサービスをしてもらえるのに感心した。わたしの貸し出しカードは、何か月か図書館に来ない間に期限がきれていたが、このとき係の人に教えられて、用紙に記入して古いカードを渡すと、目の前で新しいカードを作ってもらえて、これも嬉しかった。

数日して、借りた本を返し大津絵の本を見ようと思って図書館へ行った。『大津絵の美』は行方がわからないらしくて、分館にあれば取り寄せ無ければ購入するが、一か月くらいかかるとのこと。光琳出版の方を見ることにした。

資料室に入るには、筆記用具以外のものはロッカーに預けなければならない。室内が煩雑にならないためだろうか。用紙に住所氏名を書いて申し込むとロッカーの鍵を渡される。室内は静かで、人は少なかった。資料は自由に見られる。大津絵を一枚ずつゆっくり見ていると、以前より好きになってきた。わたしは「鬼の三味線」がいちばん気に入った。肩衣（裃の上部）をつけた鬼が、徳利と大盃を前に置いて三味線を弾いている。「鬼の念仏」もやっぱりいいと思う。風刺や教訓などは考えなくても、絵そのものがしっくりとした味わいが有る。時間がなくなったので、読めなかったところを複写しようと思って頼んだ。申し込み用紙に氏名、書名とコピーしたいページを記入する。何をするにも用紙に氏名などを記入するのが煩わしいが、管理の上からは仕方がないのだろう。本を持って複写機の方へ行った。ここの機械で複写したことがないのでよくわからない。誰もいなければ説明を読みながらできるのだが、順番を待つ人が多いので、のんびりしていられない。わたしの次が女子大生ら

しかったので、ちょっと尋ねたら、その人が全部やってくれた。大きな本で重いのに、二十枚ほどもあるものをさっさとしてくれる。わたしはあわてて汗をかきながら手伝うかっこうになった。ああなんと親切な人だろう。わたしがお礼を言っているうちにその人は自分のぶんをすぐすませ、また次の人に尋ねられて手伝っている。

ロッカーの鍵を返し、汗をふきふき帰ってきた。三十六センチの大型本を七十パーセントに縮小して複写してあったので、わたしは老眼鏡をかけたうえ拡大鏡で読まなければならなかった。もう少し大きい紙を使えばよいのかもしれないが、わからないので仕方がなかった。わたしも機械の使い方を覚えて他の人を手伝ってあげられるようになりたいと思った。

図書館では、貸し出しもコンピュータでするので、本の表紙に貼ってある番号と、こちらの貸し出しカードの番号とをピッピッと音をさせて機械に入れるだけで、返却日を印刷したシールをはさんですぐ貸してもらえる。わたしの学校時代には、本を借りようとすると、カードで調べて、申し込み用紙に書いて、書庫から出してもらうのを待つ閉架式が多かった。府立図書館は、入るにも行列しなければならなくて、いつも学生が並んでいた。わたしは生物のレポートを書くのに、大学の図書館では必要な本がみなすでに借り出されて、残っていないので、府立へ行ったが、やっと借り出したものもあまり参考にならなかったという記憶がある。いまでは学校でも、市町村でも、図書館が整備され、本も手に入れやすくなったから、ずいぶん便利な世の中だと思う。

それでも、わたしの高校時代の図書室はよかった。一年生の時は、滋賀県立女学校を転用した校舎だったので、床もきれいで、図書室は誰かの書斎のようによく整頓され、美人の司書さんが机の前に一人だけきちんと坐っていた。あまり生徒は利用しなかったが、わたしは恐るおそる入っていって、夏目漱石や島崎藤村を初めて読んだ。

二年生からは膳中とよばれた男子中学の後の校舎に移ったので、床板は磨り減り木の節の飛び出した古校舎だったが、ここの図書室は司書が何人かいて、室も広く、よく読まれてくたびれた本が修理されて雑然と並んでいた。これがかえって親しみやすく、わたしはせっせと通った。父に見つかると「アホの小説読みと言うて、そんな物を読む奴にろくな者はおらん」と言われるのがいやで、暗い所にかくれてよんだ。ジイドの『狭き門』などは涙を流しながら読んだのに、今は内容が思い出せない。

大津絵の「藤娘」についてはよくわからないまま『方向』一三〇号に書いたら、主人の弟の長島の禹雄さんが、能の「藤」についての資料を贈られた。

この曲は古歌から数多くの歌を引き、これをちりばめて作られているが、ストーリーらしいものもなく、ただ藤の美しさのみを歌いあげている。…

と説明されており、藤の花の精が出てきて舞いを見せるというもの、能「梅」もその一つで、梅の花の精が舞いを見せるものだそうである。本を見ると観世流の謡曲のなかに二曲ともあったが、わたしは気づかなかった。この「藤」は作者不明とされているが、名女川本（なめかわぼん）間狂言伝書に南部備後守信恩（のぶおき・一六七一―一七〇六）の作と書いてあるという。そうすると大津絵の「藤娘」の描き初められた時代と重なるので、能と大津絵、能と歌舞伎はつながっていると考えられる。大事なことを見落としていた。

大津絵の又平が出てくる浄瑠璃「傾城反魂香」も図書館で借りたが、その本の中に坂田の金時の出てくる「嫗山姥」もあって、思いがけず面白かった。これからは高校生の時ほどでなくても、もっと図書館へ出かけて、たくさんの人の知識や、技術を借りることにしたいと思っている。